

佳作

やりとげる気持ち

茨城県ひたちなか市立外野小学校六年 海野 喜菜

私の住んでいる市では、競技場の都合のため、今年だけ六月に陸上記録会があった。六年生になって間もないのに、一年生のお世話や運動会の練習、いそがしくなった習い事にプラス、陸上記録会の体力を使う練習となると、とても大変だった。

そんな中、クラスではリレーの選手を決めることになった。リレーの選手には、クラスに男子四人、女子四人で、ほ欠が一人ずつ計十人が選ばれることになった。女子の五人のわくには、百メートル走を競争して決められることになった。クラスに速い子はたくさんいる。けれどもその中でなぜか私が選ばれてしまい、私はとてもびっくりした。なぜかというと、私は運動神けいがいい方ではないから。一年生のときなどは、体力テストでE級をとったり、水泳を習っているのに泳ぐどころかうくこともでき

なかったりした。でもそこからくやくしくなって、ちよつとずつ運動して、持久走で入賞したり、体力テストでA級とったり、泳げるようになったりしたけれど、運動には自信が持てなかった。だから、選ばれたときにはうれしさと不安が混じったような感じだった。リレーに対してなんの知識もなかった私だったけれど、チームのみんなに教えてもらいながら、少しずつ、私なりに上達していった。毎日の練習では足が痛くなったり、思うようにタイムが出なかつたりして、やめたいと思うことも何度もあったけれど、練習を積み重ねるうちに、チームのみんななど、リレーをすることが大好きになっていて、運動に対する考えが少し変わったような気がした。

そして、本番。天気は最悪だったが、すぐ止むというので、予定より十分ほどおくれで行われた。リレーは朝イチだったので、びしょぬれのまま走ることになった。天気のせいもあってか、みんなピリピリしていて、とてもきんちようした。第一走者なので、スタートラインに立ったとき、心臓の音はマックスだった。「大丈夫。いつも通り」。心の中でつぶやきながら一生けん命走り、バトンをつないだ。アンカーの子が一位でゴールし、今までで最高のタ

イムで予選を通過できた。自分達でしたことが信じられなかった。決勝も、結果はまあまあだったけれど、自分達の中ではとてもいい走りができた。クラスや同じ学校のみんなにも

「すごかったよ。」

などと言ってもらえた。後日、担任の先生からも、おほめの言葉をいただいた。

競技場からの帰り道、私は今まで感じたことのない気持ちだった。胸がじーんとする感じ。これが感動っていうのかな。でも、映画やドラマを見た後の感動とちがう。きっと、自分達でやりとげたからだと思う。これからも、自分でいろいろなことにどんどんチャレンジして、やりとげ、感動をいっぱい感じていきたい。